

伊藤一彦歌集『遠音よし遠見よし』

大口玲子

遙か遠くをあぐられる心

『遠音よし遠見よし』というのびやかな印象のタイトルは、牧水を胸において選んだものであるという。しかしながら、遠くの音に耳を澄まし、遙かの眺めを見つめようとする態度は、牧水の没後から九十年を迎えた今の時代においては、時に苦しいものであるのかもしれない。

- ・月見れば無垢もまた無苦も地上にはあらずと思ふ影踏みて行く
- ・ひらひらとまためらめらと日本の火と戦場の火と異ならず

遙かな月の世界に照らされる時、地上に生きている人間としてこの世の酷薄を実感するほかないという一首目。「幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」と歌った牧水を追うように、自らの影を踏みしめながら苦しく歩き続ける作者がいる。二首目では、眼前の火をきつかけに遠くの

戦火に思いをはせている。さらに、地理的な遠さだけではなく、時間的な遠さを遡って、作者は「戦時」を見つめようとする。

- ・雨あがる待ちてわれ抱き軒下に戦時の母は何思ひしか
- ・死に吊られ母は見にけむ戦時の火、戦後の貧そして故郷の街を

満百一歳で亡くなった母を詠んだ作品はどれも心にしみるが、戦時下に子育てをしていた母の思い、死を迎える瞬間の母の視野を占めたであろうもの、それぞれに鋭く迫った二首は忘れがたい。二首目には詞書として斎藤史の「鷲に吊られ野鼠が始めて見たるもの己が棲む野の全景なりし」が付されている。

- ・憎むとき蛇のごとくと言ふなかれ人のごとくに蛇は憎まず
 - ・うすべにの鯛の刺身の吾にあはぬ美しさなれば箸とめ眺む
 - ・北国の雪気も雪解も知らずある人間に欠くるものを教へよ
- 他者を「憎む」感情を持たない蛇、刺身にされた鯛の身の鮮やかな色彩、人間は決

して万能ではないという認識。牧水と同じく、作者がつねに詠んできた自然と人間との関係は、親しさを越えて時には人間の愚かさや不完全さを前面に出す形となっていることが印象に残った。自然の危機が叫ばれつつ解決を見いだすことができない、今の時代に対する鋭い批判でもある。

- ・夕闇の部屋の中まで霧入ると牧水書きし山寺こころ
- ・遠音よし遠見よし春は野への道ひとり行きつつ招かれてをり

日本各地への旅の歌を多く収めた本集の中で、まるで同じ空気を吸っているかのようには牧水の気配を感じさせる歌に臨場感があり、味わい深い。「遠音よし遠見よし」の心は、「今、ここ」という目先のことばかりにせわしなくとらわれがちな現代にあって、遙か遠くをあぐられてやまなかつた牧水の心を生きようとする作者の矜持でもあると思う。天正遣欧少年使節の伊東マンショになりかわって詠んだ十三首の連作「時を超える祈り―われはマンショ」も、若々しいあくがれの心に満ちている。

『土と人と星』に続く第十四歌集。第三十三回詩歌文学館賞短歌部門受賞。